

## 発祥校訪問で学ぶ大学自校教育

### —追手門 UI 論の場合—

基盤教育機構教授 東田 充司

#### はじめに

追手門学院大学での自校教育講義は、2013年度に「学び論 A」として開設されたのが最初である。翌年度「学び論」を含めての2年の準備期間を経て、2015年度から現在の「追手門 UI 論」として自校教育が正課科目化された。建学の理念や歴史を知り、創設者をはじめとする主要な人物の役割や、今に至る教育研究の流れやその成果などを様々な観点と多くの方法により学ぶ。

また、一貫連携教育の推進を目的に天野利武初代学長により構想され発足した教育研究所は、2014年に一貫連携教育研究機構として再発足することになった。初年次教育を担当する基盤教育機構長として「追手門 UI 論」を推進する梅村修機構長が、発足当時の一貫連携教育研究機構長を兼務したこともあり、他大学では見られない特徴がいくつも見られる。そのひとつが、発祥校である追手門学院小学校と、隣接する大阪城に学びの場を移して行われる講話と巡検である。

「学院歌“金城の薨（いらか）”を見てみよう」と称した発祥校訪問は、追手門学院小学校を訪れ、小学校長の講話と周辺散策を行うものである。金城は大阪城を指していることを現地で実感し、大阪城大手門が「追手門」の由来であることを体感することにより、自校教育に資するという目的がある。筆者は追手門学院小学校長時代に、この講話と大阪城への巡検を担当してきた。昨年度より同一法人内の大学へ異動となり、「追手門 UI 論」の担当となった。井上恵二第22代校長が前年度までの筆者の役割を継承することとなったのが、2018年度であった。

この発祥校訪問は、参加学生から毎年高い満足度を得ている。その反面、参加条件に対する不満は少なくなかった。大学の所在地である茨木市から、小学校がある大阪市中央区までは高速道路を利用しても1時間近くの移動時間を必要とする。90分の講義時間内には大学に戻れない。つまり、その日の「追手門 UI 論」以後の授業を履修していないことが、参加の前提条件となる。さらに、この条件を満たしたとしても、所属しているクラブ等の公式試合で大学に戻ることが不可能な場合等も参加が叶わない。結果として、参加できない履修生の方が多いという状況が続いていた。

発祥校訪問への参加学生の拡大を目的として、開設を土曜日に変更して筆者が前小学校長の立場で講話を担当するとともに、大阪城での巡検箇所を大きく増やして主目的化する試みを行った。ここにその概要を記すとともに、大方の皆様のご批正をお願いする次第である。

## 発祥校および周辺立地

追手門学院は、発足以来大阪城に隣接した地に位置する。近隣には大阪府庁や大阪府警本部がある交通至便な都心部でありながら、大阪城と大阪城公園に隣接した緑豊かな教育環境に恵まれた地域に存在する。1888年(明治21年)に設立された大阪偕行社附属小学校は、大阪市東区京橋前之町2番地の陸軍用地(当時の大阪鎮台監督部材廠)に所在し、現在に至る。1886年に設立母体の大阪偕行社の家屋が建設された場所が、現在の追手門学院大手前中学校・高等学校所在地である。これらの立地は、母体の大阪偕行社が陸軍の将校クラブであったことに由来する。

また、隣接している大阪城内には、ロマネスク建築の第四師団司令部庁舎が用途を変えて現存し、化学分析場が残る大阪砲兵工廠跡もまた陸軍関係の施設である。追手門学院小学校近隣にあるドーンセンター(大阪府立男女共同参画・青少年センター)は、1937年完成の大阪軍人会館跡地に建設された。大手前病院(国家公務員共済連合会)や大阪歯科大学および附属病院、大阪合同庁舎第1・3号館は、1888年移転完了の大阪衛戍病院(後の大阪陸軍病院)であった。こういった歴史的な遺構や現況を確かめることにより、発足当時の周辺環境を知ることができる。

さらに歴史を遡るならば、1614年にこの地であった大阪冬の陣の舞台でもある。この戦いに勝利した徳川家康の申し出により和議が持たれ、一旦争いは終結する。翌年の大坂夏の陣により大阪城は陥落し、後に江戸幕府により新たにその上に建て直され、新たに石垣も築き直される。追手門学院小学校内には、貴重な豊臣時代の石垣遺構が現状保存されてきた。創立130周年記念事業で完成したメディアラボ地下2階には、この貴重な石垣遺構が見学できる「おうてもん石垣ギャラリー」が設けられている。京橋口馬出し曲輪周辺の石垣をそのまま利用し、出土品とともに展示している。追手門学院のシンボルである大阪城に関して、これらを確かめる意義も大きい。

その後の学術調査により、新たな事実も判明した。129期卒業記念品のひとつとして設置された「豊臣大坂城ゆかりの地 追手門学院小学校」銘板<sup>(1)</sup>には、下記の通り記されている。(以下引用)

これまでこの辺り一帯は、豊臣秀吉が築城した大坂城の三の丸の跡地と言われてきました。しかし、平成15年の(公財)大阪府文化財センターの調査により、三の丸の理解に大きな変更が迫られました。現在は、京橋口馬出し曲輪の跡地と想定されています。

この曲輪は、秀吉の晩年にあたる慶長3年(1598年)に、第四期工事として城郭の防御力強化のために造られたようです。造られた石垣は、慶長19年(1614年)の大坂冬の陣による講和条件で埋め立てられてしまい、当時の様子を完全にうかがうことはできませんが、周辺の建設に伴う発掘調査で再び姿を現し、一部ではありますが、当時の面影を垣間見ることができるようになりました。石垣は生駒山系、六甲山系から運ばれた花崗岩が使われ、自然石の形を利用した『野面積』という積み方で、現存の大阪城とは趣が異なります。(引用終わり)

## 追加したフィールドワーク 1（上水道整備に寄与した創設者の功績）

追手門学院小学校の前身である大阪偕行社附属小学校は、1888年（明治21年）西日本最初の私立小学校として誕生した。大阪偕行社は、陸軍の将校クラブである。この大阪偕行社の前身は「博行社」である。1876年大阪鎮台司令官三好重臣少将らにより合同学舎として設立され、1878年に「武ヲ講シ兵ヲ談シ傍ラ詩歌文墨ニ遊ヒ親睦ヲ深メル」目的で、大阪博交社が設立された。1882年に同じ目的で設立されていた東京偕行社と合併し、大阪偕行社と称することになった。1886年に、現在追手門学院大手前中高等学校所在地の大阪鎮台監督部用地を借用して社屋を新築した。開社の式には陸軍中将・子爵であった高島鞆之助が祝辞を、大阪偕行社幹事長・少将であった今井兼利が答辞を述べている。

この翌年に設立された大阪偕行社附属小学校は、高島鞆之助が「国家有為の人材の育成」を目指して設立された。高島鞆之助中将、今井兼利少将（大阪偕行社幹事長・第七旅団長）等の主唱の下、大阪偕行社の社員と在阪の財界人の支援を得ての設立であった<sup>(2)</sup>。

創設者高島鞆之助には、3つの顔がある。ひとつは、明治天皇の侍従番長である。下級武士であった高島が栄誉ある職責を果たしたのであるが、薩摩藩に伝わる郷中（ごじゅう）教育により薫陶を授かった西郷隆盛の推挙による。次に、西日本最古の私立小学校の創設である。「国家有為の人材の育成」を建学の理念として発足し、この理念は戦後「社会有為の人材育成」と改訂され、創立120周年を機に「独立自強・社会有為」として現在に至る。最後は、政治家としての活躍である。陸軍中将正二位勲一等子爵である高島は、陸軍大臣、拓殖務大臣、枢密顧問官等を歴任した。

創設者が私財を投じて開設された私立学校は、国公立の学校に比して創立者の「建学の精神」の持つ意味が大きい。たとえば、玉川学園を創設した小原國芳は教育学者であり、甲南学園創設者である平生鈞三郎は実業家であるが廣田弘毅内閣で文部大臣を務めている。陸軍中将が創設者であり、1891年陸軍大臣への就任に伴って大阪を離れた創設者の教学面での貢献は、残念ながら極めて少ないと言わざるを得ない。

とはいえ、大阪鎮台司令官時代の1885年に大阪を襲った大水害に際し、工兵隊を出動させて濁流を堰き止めている天満橋と天神橋の2つの橋を壊すことにより、淀川の氾濫を防いだ功績は大きい。創立120周年を機に刊行された『マンガ追手門の歩み』の中の高島鞆之助を描いた冒頭場面に、この様子が紹介されている。大阪源之助と称する子どもが、幼小時代に遭った大水害で高島鞆之助に助けられ、後に大阪偕行社附属小学校に入学後に再会するという設定である。このマンガで描かれている第8代片桐武一郎小学校長、八束周吉初代学院長、天野利武初代学長の豊富な教育面の貢献に比べて、社会面や教学面に直接関わる事柄はこれだけである。

明治初期、コレラなどの伝染病の流行や大火災が続発したことにより、水道布設を望む声が高まる中で、1895年大阪城内の配水池から自然流下により給水が行われた。この当時は軍事施設であ

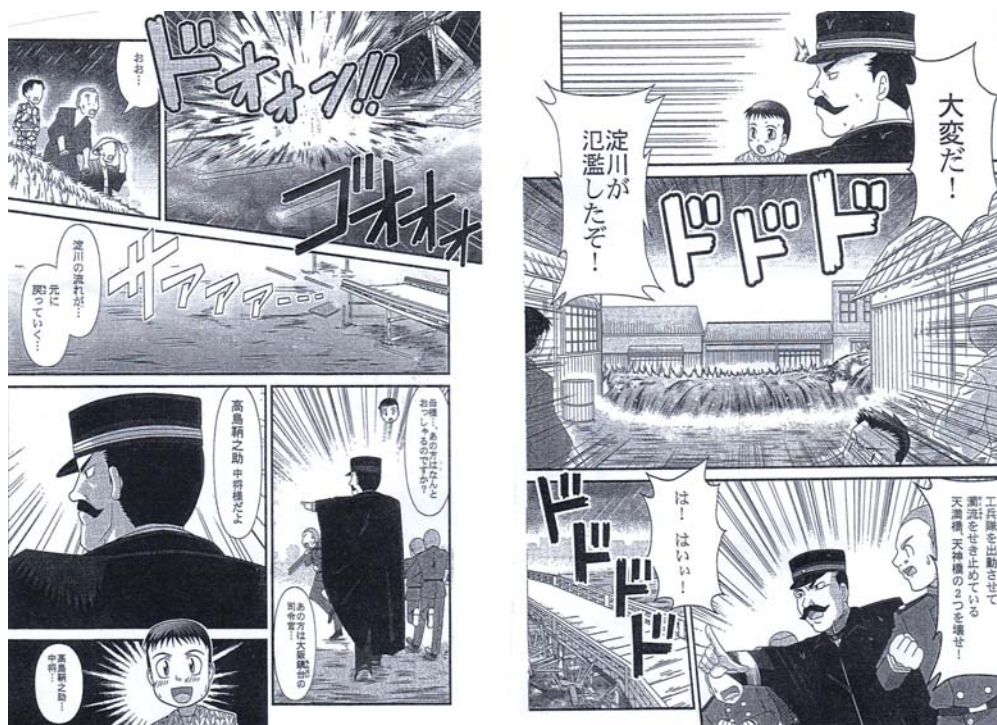


図1 「マンガ追手門の歩み」に描かれる 創設者 高島鞆之助<sup>(3)</sup>

った大阪城内の設置許可には、当時陸軍大臣であった高島鞆之助の決断があった。

軍用地であった大阪城内の天守台隣接地に、自然流下式の配水池の建設を決定するには、当然のことながら陸軍大臣の判断が求められる。この時、大阪市の要請に対して高島鞆之助・陸軍大臣は、陸軍用地の一部を「無償で貸与する」と許可した。当時の大阪市年間予算の3倍に相当する250万円の巨費をつぎ込み、1892年に着工し、3年3か月の歳月をかけて完成した。これによって大阪は、横浜、函館、長崎につぎ、全国で4番目に水道を持つことになった。大阪城内天守閣横に高所配水池を設けることによる効力・安全性・経済性は特筆されるものであった。これらの優位性について、内務省衛生局雇工師であったW. K. バルトンは、1891年1月7日の大阪市会水道調査委員会で下記の通り説明している<sup>(4)</sup>。

「大阪市給水ノ工事ニ付、基本源ナル貯水池ヲ大阪城ノ天主台ノ所ニ設ケ度ク考ヘマス。パーマー氏ハスル設計ハ致シマセヌガ、此貯水池ニ於ケル利益トハ、第一水源カ高所ニ在ル為メ、配水ノ壓力常ニ相平均ヲ保ツコト。第二、蒸気力ヲ大ニ減シ得ルコト。第三、排水管ヲ細クスルモ給水量ヲ減スルニ至ラサルコト。」

長さ60.6m、幅30.3m、平均水深4.85m、有効水深3.64m、有効容量6,000m<sup>3</sup>もの3池からなり、一日の最大給水量の約9時間分を賄うものであった。現在でも現役で使われているばかりでなく、自然流下式の利点を生かして大規模停電等の非常時にも断水の心配がない特徴がある。



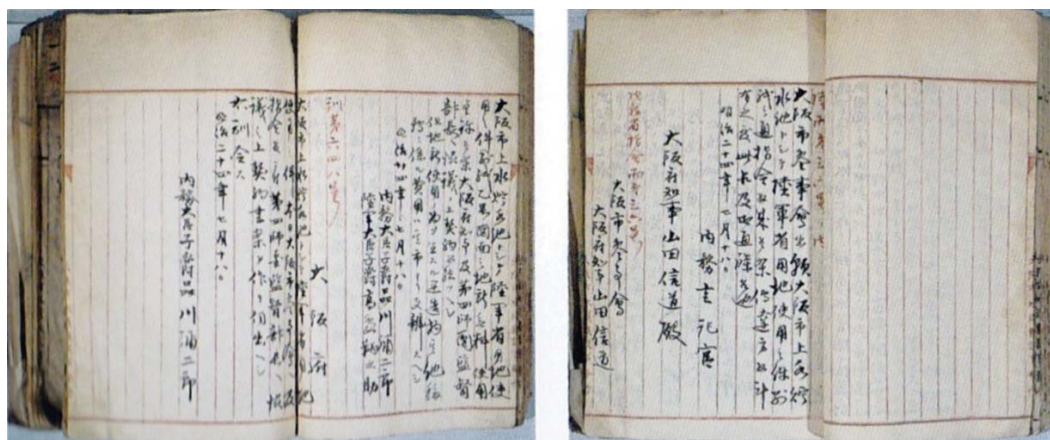


図2 城址使用許可書(5)

当初原案である市内3か所に設ける配水塔により自然流水にて配水する予定を、市内中心部でも標高の高い軍用地であった大阪城内に変更するには、陸軍の許可が大前提であった。ここに、大阪鎮台司令官として大阪偕行社附属小学校の設立をはじめ、大阪の将来を考え続けたであろう高島鞆之助だからこそその決断であったことが推察される。

## 追加したフィールドワーク2 (学校名である追手門学院の由来)

終戦直後、第四師団所属の財団法人大阪偕行社は解散を命じられた。学校は学校設置者の解散により、経営の主体を失った。1946年2月22日財団法人錦城育英会(中田守雄理事長)が認可され、校名は大阪偕行学園と改められた。しかし同年12月6日、内務省令第52号により錦城育英会は解散団体である偕行社の承継団体と認められ、解散を命ぜられた。1947年3月に財団法人大手前学園(中田守雄理事長)として認可を受けた。しかし、11月に校名を追手門学院と改称した。近隣の70余年の歴史を持つ大阪府立大手前高等学校と類似しており、混同を避けるため、府の勧告を受けたものである。

名付け親は、中田守雄初代理事長である。学校所在地の旧町名追手通(大手町と1872年に変更)の追手が大阪城正門である追手門に由来するところから追手門学院となった。なお、正式に校名が許可を得たのは1948年5月である。

第40・41代大阪府会議長であった中田理事長が、島田牛雅大阪府学務課長に人選を依頼して推挙されたのが、八東周吉初代学院長(1946年着任時は大阪偕行学園の学園長)である<sup>(6)</sup>。戦後の混乱期、中田理事長の果たした役割は極めて大きい。



図3 中田守雄初代理事長

## 追手門学院発祥の地『金城の薨(いらか)を見に行こう』巡検の実際

5月25日(土)の午前と午後の2回に分けて、追手門学院小学校と大阪城への巡検を実施した。授業担当者を含む基盤教育機構所属教員5名と学生スタッフ10名で運営した。158名(午前59名、午後79名)の受講生が参加した。これは、受講生全体の約52%を占めた。あくまで希望制ではあるが、前年までの参加率1~2割程度を大きく上回り、土曜日開催の効果がみられた。

大阪メトロおよび京阪電車天満橋駅から各自で大阪城大手門に向かわせ、大阪城内の巡検を行った。道に迷いながらようやく辿り着いた受講生にも笑顔が見られ、積極的な質問に代表される主体的な参加意識が見てとれた。上町台地の勾配を実際に歩いて確かめることで、高地にある配水池を実感することができた。参加学生相互による「教え合い・学び合い」を目指して、前半は任意の5人グループによる巡検を行った。大阪城大手門、大手口柝形巨石、空堀排水管、旧第四師団司令部庁舎、天守閣の5か所で施設を、写真撮影を含めて観察させた。

旧第四師団司令部庁舎の北側空き地に集合した後に、衛生面から嚴重に管理される大手前配水池を見学した。全国最古参に属する1895年の施設は、現在でも現役で活躍する。明治期に大阪砲兵工廠で製造された堀を横切る排水管は、歴史遺産である。江戸時代の空堀に、明治時代の巨大な排水管が通る光景は、一見すると無粋な取り合わせではある。しかし、歴史的な背景を辿ることにより、コレラや赤痢などの感染症を防ぐために果たした創設者の社会的な功績を、時代背景とともに認識させることができた。

また、追手門学院の命名の由来となった大手門は、現地の解説文「城の正面を大手(追手[おつて])と言い、その入り口を大手口(追手口)、設けられた門を大手門(追手門)と言います」より確認することができた。大手門(追手門)とは一般的な呼称であり、決して大阪城にのみ使われていない。これに対して、金城(錦城)は大阪城を指し、八東周吉初代学院長が作詞した学院歌の冒頭「金城の薨は高く」の意味を知ることができた。解説文の続きにある、「1628年(寛永5年)に徳川幕府により大坂城再築工事の時に創建」されたものであるとの記載を確かめた。さらに、大手



図4 空堀に設置された排水管



図5 高地配水唧筒(ポンプ)場

門の屋根瓦に見られる、徳川の葵の家紋を確認することもできた。

これら大阪城でのフィールドワークを経て、追手門学院小学校での見学と講話に場所を移した。創設の地から見える大阪城天守閣を確認した後、創設者高島鞆之助に関する資料類を集めた高島ホールの上に、校内に残る豊臣大坂城の石垣遺構を見学した。大阪市内を南北に貫く上町台地の北限に位置するこの遺構は、校舎の地下2階に位置する天然石の形状を生かした野面積みによる。

講話では、追手門学院を命名し、戦後の廃絶の危機から学校法人の礎を創った中田守雄理事長について、詳しく扱った。どうして氏は初代理事長就任に至ったのか。それは、戦中から戦後にかけてご子息である中田武仁氏（小学校61期、中高4期で、国連ボランティア終身名誉大使）が在学していたことによる。さらに、国連ボランティア終身名誉大使就任の経緯は、ご子息である中田厚仁氏（小学校91期）が、国連ボランティアカンボジア選挙監視員の任務中に殉職されたことによる。八束周吉初代学院長が目指した中正道の教育は、学院歌にも歌われる「新しく国を築かん」にも表れている。校名に由来する大阪城大手門を確かめ、親子で国連を通じて世界平和に貢献された偉業に触れることは、追手門学院への帰属意識を確かなものにすることができたであろう。

## 発祥校訪問を終えて

参加学生からは、普段の座学だけでは分からない、創設者や学校名に関する多くを学ぶことができたとの前向きな感想が数多く寄せられた。昨年度までは、時間的に大手門の入り口まで行くのが精一杯であった。しかし今回は、大阪城での巡検を最初に行う時間的な余裕が生まれた。じっくりと大手門を見学し、創設者ゆかりの大手前配水池や旧第四師団司令部庁舎を確かめることができた成果は大きかった。以下、ある1年次参加学生が書いた授業と巡検の感想を掲載する。

追手門 UI 論という授業を受けて、私はこれから自分の通うこの追手門学院に誇りを持って生活しようと素直に感じる事ができた。胸を張って追手門学院大学を卒業したと言い、あそこは素晴らしいのだと全国にもっと広めたいとまで考えるようになった。どうしてここまで大切で偉大な歴史を何も知らずに入学してしまったのか、私はとても幸運だったのだろう。

最初、授業を受ける前の私のこの授業に対するイメージは、「何か宗教的なもので、追手門を好きになれ！とか言われるんだろうなあ」というようなものだった。しかし、全く違ったのだ。驚いたのは歴史の長さだ。すべての授業をフルに使っても少ししか学べないほど濃い歴史があり、内容も想像のはるか上を行く。中でも、単なる軍人養成のために作られた学校ではないことが、巡検を通じて分かるなど、驚きの連続だった。これだけの歴史があるからこそ、將軍山会館が建てられたのだろう。

おわりに

土曜日に変更して実施し、大阪城での巡検を充実させた今回の春学期での発祥校訪問の取り組みは、内容の充実とともに参加者の飛躍的増加という点から一定の成果を挙げたと判断している。この追手門 UI 論は、複数クラスで開講しているが、開設当初よりチームとしての教員集団で授業準備を行い、日々の授業を実践している。毎週欠かさず行われる打ち合わせの中で検討を続け、担当者以外の教員も含めた協力下で実施することができた。さらに、発祥校である追手門学院小学校をはじめとして、一貫連携の推進に深い理解をいただいた各方面の皆様方に、この場を借りて改めて深く感謝する次第である。

今回報告した取り組みは、秋学期には一部内容を変更して実施することとなった。具体的には、春学期同様に土曜日を実施したものの、大阪城での巡検を大幅に縮小した内容で実施せざるをえなかった。当初は秋学期にも春学期同様の内容で発祥校訪問を行う予定であったが、各方面からの要請により開講クラス数を急遽3クラスに増やしたことによる参加者数の増大に対応できなかったというのが、その唯一の理由である。とはいえ、春学期に実施した158名(参加率52%)の参加者による口コミも手伝ったのであろうか、12月7日(土)に実施した秋学期の発祥校訪問には、314名(参加率73%)もの多くの参加者を数えた。

本年度より、基盤教育科目を含む全学部1年次授業は、新設なった茨木総持寺キャンパスで行われている。新しい時代の自校教育をさらに推進すべく、今後も本学ならではのより良き授業を目指して改善を続けていきたいと願ってやまない。

注

- (1) 追手門学院小学校第129期卒業記念品(2018年)『豊臣大坂城ゆかりの地 追手門学院小学校』銘板(追手門学院小学校東門横に設置)
- (2) 追手門学院小学校百年志編集委員会(1988年)『百年志』: pp.78-79.
- (3) 学校法人追手門学院(2012年)『マンガ追手門の歴史』: pp.13-14.
- (4) 大阪市水道局(1996年)『大阪市水道百年史』: pp.182-183.
- (5) 大阪城天守閣特別事業委員会(2004年)『特別展大阪城の近代史』: pp.39.
- (6) 追手門学院小学校百年志編集委員会(1988年)『百年志』: pp.162.